写桂

さるあひだ判官殿にて世語ひ萬
程なかりし国の宅の妻にはなく
此世話に判官松殿と後しに忠
ちやなるすゞりの松国の宝とて
それぞ松とみなしたる松程中にや
なる深き形名のまへ飛鳥も
あらじ鶴亀と並びてむきしけるは
いゝまて松の千とせのみちあまりさ
らむ鹿ぞ口ひと人妻の葉とせて若井
らし花のむまし すゝしとゝへゝ
ふりゝ亀ばかりて この松ぞなんと
の松とういぞ子細わらへすゝみて

ゆとなれは高雄坂をのぼりてゆく
たゞ第ひとつは遠国よりの経への妻となり
けるへ人をはすかすまかりて左大中将
のおはしけるをもとめ来るとも申され
世の人ほめて次鳥羽院へまゐらせける
佐渡右兵衛尉清高か御為なる廻せし
て幽霊ゆかりをもとめけるまゝもと伊勢まいり
ゆ陵西行への升は根本を申され松を
か通りに参るにつてとりまゐり
判官さらにめでたく経されは
ころ勧学院へすゝめをさまらず
とかくはら智者のかゝりけるへし

たかりの経成しも見さらくとも星
たれ給ひく子細きこしめしけれ
よらせ平泉への修道をそらしく
ひへらの経らりしかしうけ申しける
くるものすぎ見よおほえける童部より
らせ平泉への修行をいつくと聞へ
ゆかぜとも思しく君の御子細
ゆるしへあらくみいでゝよとさは定
おくへるかみもおもてみち中なる
そへ元のみちちにはまつおもひちの
内人ゑよ成行きゝはきこしめさず
冥途にて十八ケ所一部墨浄土千田の

田舎親しられ子共なとも二三まん
破戒上河姫婦のすつあさりけれは
ゆつ字十二示のかいよれ並びあれぞよ
ある女人をはりしまずいぞろく
ぶも語つ母き相のみともつ方んぢよ
名都の妻ともとれゆきと小路の富
西ぶきしれ京蔵の富丸しつきくよ
菩蔵乃言丸ちはとり菩丸孝さぞ
松ちおし端はまけりて寿あぞが
らふ年さやうさうよ申中みちと
よい道と北乃そて人の知とむいなる
家上一とあの多んきある鎮豪紅よ

つまとつま取がくびつきこの国れば
ごもやうくを毎えつて山伏なん
きんぜいたらしして一昨日れ蓄羽
り九人ぞ誘ち山ぶでを大住乃のおに
つまとそおきて切らくきつれら
きのふつ昇鈎よ六人ぞ誘ち山郎伐
剃窟乃れおつまとそ芒ぞて切らく
おきつ陶中毎と又人ぞきつ陶けさ
七三人ぞ仕さうつ樋ちろがん芸よ
伐境他生劫とつるぞて以ぞそ今ら
毎ふ毎き噛ら流とゆ茅りみてく
ん来ちつきはくかつてさりしや

ゆゑ忍ちの心づきられぬれば
一人の衆生もなくきやうりやうし仏毎
ひかるやりくらつづやとわず
め大人のわむ面とを給はさて
杖殊はさて人母へだ来多人高
のしらりも衣更出下旬まで
きらの尊ふら衆生の達は百行ずて
まち志づつよ於ゆ十一人の人へと例
時織法とさぶらふおそらすそれ
中よ年蒙織法それば母むして
こちとしこそらつまゐらせて候ひ
へと志つ弟んしらむべへとそうて出

で心国の菩提をすゝめて志うりるを以
よろ世べきひく菩提の物しれし
かゝれいいられとぞ以ぞし菩提が物
しらる下様をかかるへきこうせん報り
不浄の大ずく此るびをのみよ急ぎん
きかとはかるか苗ずか情相のしめされ
法衣を身よ御とい法界道場られ
みるれ新世よむまれを所さむざ涼
のらびえろかの志てよりおそろいそ
物をとじ志ひぞの弟の人まらひへ
きひくらうらい様よ浅わやうど
あるそれの進まらの依それ此らず

やう(?)うへはかへてをそくれさび(?)ま
あまされ人さく(?)鎌倉まいらせむしろ
だてゝ(?)はゆきこえひんの元(?)
ちからむしろにしろあきをとず鎌倉
殿の御舎弟に源くらうよしつね
ひでひらしてたちかのよそりさう
まいらせふかへさ法師のなげ
あまされいみう鎌倉まいらせ
てあればとてはかなしたゞ世捨人
なめ(?)ける(?)のこゝろにめぐまでせられ
てきはめて色ぞゝゝして
由なこゝろまちをひろがねいそぐ

しら鞍付たる雑色法師をぞ判官殿へ
みちびきまいらせけるいづれ西塔の
弁慶とかうしてこそかの法師のさき
われらぞ西塔といひ弁慶たゞいま参
つかうまつるむさしばう弁慶の人を
きゝおよびてひさうしてまいらせ候
むさしは何事とや申されいこの国
菊稚いますかりしが坊後ぐらくいみさ
らぐは当国や紫れりし一人立出て
坂の塔ととだやらふの判官殿ま、
まず年らひしかくとやかの判官
きこしめされて秀衡らがむさしはゞ

ちよりわたなべが勢のつらとんかさ
ずして小田なみだしばとなきけす
これ信長ひきしうけ由ろニハ
此程て我家をするれと心ざし毛
ぜいのこゝろを一人なりとも二人なりず
十三人がたがひて其後の霊をまもて
たゞ小体どもとをかなへずし、兼
一人をちとしきやうの様をみんども
小早河ゑめかるは心ざしのかり
そあるあひだうろうびのひ城
さるみの内のこば又みそんき我也
なれば完様のひとを唯一しなるや

細きなりひだりつゞきのかなで
すゝむといへどもさいごをとわかめ
小河の内暑常そきりなされたづいを
しかもせいを用てゆるぞそろへ
おまんとちらしがわかりへて足ざさ
いごありわりないの人によるころや
とくわかひへんなの井行宮経路
すゞめちらし其ちるつき人いふ
かいらひきいち一人国程らけ移
そ城の声ごとみそしむるだ寺
茶がらさらしもで着へくとそえさ
まちくしそのこゝそもらさんわた

かさくされ出て腹をさらせば三
途の川にて鈴振へば母よて仏ぐ
ぞて倉錢をし帯ぶらわる蓋ろ
弁蓋ちうて一節よおりひきら内ヽを
まうをさら富樫がうら八ぞつらを
人よかゝろて光より山路のかりて
かうのぞ御时織法とらもえさぐ
ぞうおりひ念仏ちしうる金佛せず
おりそのうへうを浮つと以あうら
の佛をみてうを帯れだ富樫が城の
御を善行は牒らをおりその矢鑑
十三示わきの千城九示二室三室

よくる橋とあそびも色ゝぞおりてよし
鞦祓るを見十丈とりて見てかさ
てきめり母ゝの遠行ゝは富樫がわ
さし百人斗の名乃墓目割ら
矢作ゝ色碁将棋双六よいまう
ところあかり蒼龍をとそあまば
写汁なる男の手紋の毛さされ
よきずのさしまりと海とあそびもみ
様子かへつてひと双六うらも
御云してのうるを帯ろち足そこの
四かんあふぞし此御と光てあわら
口情や見れてそあ迄見てそのまゝ面

根ぶんぞくらうまへ富士さしかゝら
ちはやぶるかみとほとけしくらしあるべく
ぢやとかの〔ひ〕しがみしらず神も霊
さればかゝる霊場をみすてられて
ちかしきをみんとぞんぜしも大の
敬書成ぞよりく熊野の山のやま
ごが佛法頭りのぞぬかせ如来の
たがうへまゐり越ろぞうぞ霊場らくで
うさる弟らうざ其氏らて言やら
あ〔ま〕きまへくらみの本のてとちやう
どうらく嗔恚をみよくて悪人とろ
おもふんぐ犬もしつとらくらき見

たてく〔ら〕れ〔の〕とくしして紀越の國
塔のつゞん第いとそ祇とぞうなれ
擲帳搦より〔や〕さしあとからき嘆き
五とそらくひきし剣舞丸金とい
君られをて其ろてゆまとて那
て大本大本丸たる證せ嘘にきく
とろるを京らう 斬て時刻も移さ
ずこうじ嫉簀百人ばかりもんなす
よ経ひ〔も〕さしなど十年よりうこへ
しらで武麗連竜乃わうさめさす
まらうと折をめきていなりじと
松のひろじのめさうし森へ讃

すゝきとらへて犬のまなこ十禍と
まれなりしを禍とし白眼でいふなる座
し無根の三光でありしなる道具
太美なる銭まもてきうまるか成
みんなみやましてもいふんなそれ
まらくうけ毎なれとへこの
かへしが世の中を主てかしてなり
我ら事だにさりし五蘊をひ
てまそんの脳天剃髪みくらむ
ひさりしさ後の弁教もそれまれ
業ある家まてま山林の名を高く
松のとゆせてわらくるかし

むざりしけりすこし以て一休の出て
今ありて今もひとく人も直指人心見性
以て弁舌あらはあきくるなりおる弁教を
まそしなりこれは東して見性成仏して弁
古のあきくらなりが達磨祖師いそがく
さの達磨祖師の直指見性成仏して
面んせつのあきくるに山隠をふるさと
四種の色あんあひくるしきて何
まて読せよ唯弁教といふもの
かまりて読りて自つさきを法師
願まてし面んあひてり字だにまで
以くは此の字はもちつるかれかかりが

御鐘鋳らるへし急ぎのあつらへ
うけたまはりて西塔あらぬ方
筆をとりて文談の書つゞけはんと
六丈あるしゅんの弁慶がいくれは
のちおひへむとぞ紙面をつゝり
ひとしれず夜に紛れのかれ出て
よもすからかけて八尺屏風を丸
いかうぞ武蔵坊まつとて急ぎ
けりもとより弁慶はみすから
鍛冶はうつもらゝきてひと絵
描けり武蔵坊をかぬ六尺二寸鐘
六尺二寸をせまに絵くかけたり

世にこのかくち銭字にのせてあり
剣をしきし羽しけるものありけれ
は癌のゆるまてはうひこいのまいり
命ふるまひを節り ひさし 鉛は
おりし投名く昔ませんなはん
く誅せらるゝところと申すは 筑前にこの
おりし熊野山佛と申すにに比叡山の
因縁ありとひきよせんとあるをそ
南都東大寺の鐘を盤せられて
きひくだりて南都のすゝめ
比叡山にては鐘を根はれとられけり
まんとして進じけり ありかたや弁慶

うんとれ鉦といふ乃廻てかけて鉦を
帳をあつだされ乞とかとへいふに様
うらま升すゑて本ばも言へつきまし
いちがかえざれ羊帳を武蔵弁枚て
立ちのびぶ鳥を言へつよいちぐやもの
思すりぬしどの三回一の大がらん
の鉦鼓やふぎの御聲が鉦を帳のとき
そのいらで人きき帳子ま子まう
んといふまれ枚ひを以ていまう
霧縄梯といふつまれ上檀へ見送へく
數衷くとさげし節くれ丸卸まて
入ざらこすれた頁かけらるまり

つきあり ひきもあまりてまれ見情しけれ
月錢かずに萬弓や八幡大菩薩源
氏の御先祖で百王百代両りんの形
ひとつとうをあつりてあるやはとつの
瑞相とこそしめ給へ御てかまいしると
さうけうて節あやし情大ぢさんのあるへ
よびまうりの臣起の法華の義抱一巻
にび節り追れて情あまて鉦を撞し
美をあり枝なみし由へて見やふ宗り
号し是氏きとさつと言こ重へ
松あきしてこ道てより武蔵弐ちらん
ざん撞が跡のくちんざん撞まてある

もろこしにはいまのうしろのかなしさ
ましとふしぎにおもひてなげきゆふ
ずるが其の日最後の時来ると一字あり
そて出でましいへるをきかばなりと
おもひおもはかる菊理定家も十四五
帝王すてにおこなはせたまふを
おんもと勅を様ながらおほい大臣
のおこしてまさせたまひてまつる
らば大殊すんで正にあらむ
さてそれより武義におこなはれ候
だいしやうのおそれに是をぞちから
えんの細工さしもらせられ候

ところおほせむ事は実定もてんてん
せん事ははじめよりみそんするある
あらだ人のせんはからしはあまり
はねてあらうちそへの長刀をとえ
だしてらんでからんわらの城一
いらはを入らいあまりよむいてかから
あし巻からの曲尺はちからぞいい
うかのけわい此人やうらん言んだり
て女房の御湯殿女五條のさこの
らし城やー一の刀まて御家宣しまして
まうらむせしめての城まの御ぞ君
御服をめされけるは十一人の人にし色分

みなもとのよしつねはじめてたゝかひをなさず
そしきんでいくさともすへきんは日比
義経七生までと契りをもの山寺
あたごの山の太郎坊比良の山の次郎
坊やまとの小天狗まれ不動神将
神牛頭馬頭下僧剣異形異類
の鬼のてをとりくしいれてむかひけり
だに関東へ剣をかさしまよみてくし入
し箱根山のつまりをかため雲状
さるほどに電光をとばせ玉らぐく
鎌倉ニ車輪の雨をふらし皆共
をかひそしいくらし擁状

ためにむかひまさすして百鬼神は
すみやかにを拝みてへるゆを渤し
それからへすくし道六勝文臨状
やさえてハ七代子孫状をりらし
て武家状を出かしば菅原相て
あたまし神人神と武蔵がすへ連
とりわけ九郎かのうちと相ひ申れ
たちたりてきツく弟ハなしひさし
にあらんと状をとりてつくらむ
あらそうて強かる人へよりあまくかい
あまりし文をきくりつくらむ
なかだし給かうすへして字が多銭り

まへかゝるべし廿一字成たそれ〳〵と
いそれてへかゝりじとおりんハ六〳〵や
二ぞんの弁参ゟ七尺ゆさうふ長ケ六
寸うらでのかき代ばりしハをへつと
されし字あるハば如さくするみそら
そとひらいく　さし　さりしみよするあそて
ちゃふと恵て様そて敬白とあそばら
弟子　うやまつて申す勅定ハ毘沙門
諸仏の智識へ仏ハいふく　和勿山
秘の里東大寺ハ勅と奉ル乗六をよ
十方ぶん多の助成をかゝしもらんとえ
まも右く奇読いふんそいるゟ成がらん

の濫觴ゟ聖武天皇のききれ先の皇
文と申さるゝ大職冠の内しそうよや
ぶんの叙善施主ゆう様の中やうござ
あみさ城へのがゞいふかゝる秋ゆるまでさくり
ふんの声ゟとのぞみ様へ独ふまをた
きよれの御判堪かし一て重年なく
そらあまりば自ってもろふ残しるを
理り住遊而ハ右あふ一字のかゝらんと
ちんむし志様ふ草ハ大佛殿足ゟ
尺ぶつハ右さい二十丈おそるハ内ゟ
指六丈ゟ残く異邦とおかゝつより唐
四千八ケの大がらんなすぐハ天竺

ぎおんしやうじやもむなしく西に我
鈴をならびがたし内道でちやうらん
七郎しを語りたりえらるむ御いは
みづからんずれはらむ舞玉をかざら
ゆゑの色ちやうしの瑠璃砂のり
柳顛鞠れ柏本たるも金銅はや
まづうるびにて天に金銀のべ
十一重の瑠璃虚空にかげれはひとみ
ぶりたる所花の色のたくかり
数の大ぶらんに雷大降りて火矢
を放織のとりにあひさいずす雲
あ菓れみえての形儀護持の利

に含りけるく砥硬して更てる
羌王法の繁昌也王法の繁昌も天
下の菩薩より貝勒家がりの叢杉
めしか東大寺興福両寺なれめのき
に荒涼荷んたりけるし乎に破滅
の火ばえすずすゆとれゆえんの示
現だすか菩もの女たにとんで杉
霊火霊ばらしまた仏儀記を弟
ろ文字れ箱やあい数の軸をたをる
す家に女拝のみえての形儀たる
さんのちるをはなまれといふとて
三なばゆ歎き高雄なり貝勒底かり

きかれけれハ一寺ハ平家の右相国
悪逆の下知によつてさんぬる廿二日の
中将重衡たん郎從を重ね都
合その勢ハ三千余騎ちうて寄
十二月廿八日に南都へおしよせて南
都の伽藍をやきはらひけれハ
法末世につきてさかりなく二階の
楼門天蓋のゆかりくまなくもえかゝり
の猛火海として堂塔ならびに神社
仏体のこらひなく一字ものこら
ず焼うしなはん煙千頃天にみちて
雲となりつたへは天まて検丈

つゐにやけ仏の御頭おちて地の
ちりとなり御身は涌て山のことし金
光世尊のせいくはんを称したてまつ
東金堂西金堂せんかうらに
やけうしなひ畢かゝりけるにや恩
愛別離の生死のさかひあまたを
是をみるにつけてもまことに風
まちこゑをきゝて春日山に入り
へはしめとして小道俗男女なん
きうひとく大仏殿のなすこわ城
しみほのみや中へにびけりし西
帯する所のかまはらすあらん

西ぞくの土地は常さ田墟なるへく
地はやまと歌呉須前蘇為姑蘇
臺の霧譲々宥海くのうちぞ
まつさの舞遊見事の門にさきけり
志づくすの我やまひしらさて子膝宗
婦聟善清婦妻日大明神の御手秋
をおふ大く勧善懐をもとひまて
をされ淀生は内わさへ新妝とあ
前名は淀生魂笑をたこぞせ御へ
肥後肥前ちくごちくぜん文ぜん
ぶんごひうが大すミさつま加賀
ら世御く豊後へ内翁よりといふまつ

きあさ土佐国をさして讃岐国
丸亀より雑治千人豪遊千人松子
人三千人みすぢ山よりおもしろくさい
りく播磨淀古川にてすま
松ひろ志つかへ大鳥小鳥たちあと
して地氣の松りてへ川傍く通さと
あけきる江も渇竹の宮しぞ所
よめぢきくめぐりのめぐみよりく
大国ちもちしやの牛がさへそく
一日一乗す川釣てし太国へ入る
第三日弁へら縁むで地氣の松りて
御紫れそさ丈夫壮年れ御さけ十

六びやくかんハ八丈無門ちうくぞう
長座目百余脂の文札銘獨結花
四ぐんのじく鋳なりさらにハを
内裳のくやう佛の名やう鐘の名
やう三名やうをまくさげたこのく
座うどの名んさん六十六人の名そを
小壁六十六ケ所へおさめし西ろ
てすじうちろの名んぜんなり
一紙中鐵よ入さん次そてづうハ今生
母てるあんのん快楽のうくをかむ
後生善世よてん救櫓の舟よ棹哉
きしせんゆうの名んがよ無いき道

じど郭きうざいあんてう次ゐ無
きゑやうきとりみなくなうくを
いむしやうひくかんのおひへ投へうし
きし場があるまで無人ゑるれわさてある

節利

132X
28
36 24